

「無散人」〔諸国奇談 東遊奇談〕

— 翻刻と解説 —

山本和明

寛政十三年初春、京都の書肆著屋儀兵衛他から『東遊奇談』なる書が刊行された。序文を記した橋南谿の言をまつまでもなく、南谿の「東西遊記」の人氣に追隨する存在であることは、その題に明らかである。旅した順序にしたがつて記すのではなく、短い話を退屈することのないよう、適当な変化をつけながら配列させる形式——「東西遊記」に倣って、『東遊奇談』もその形式を踏襲している。

「東遊」とはいい条、内容的には伊勢（「鯉節の味噌漬」「鶴沢市太郎妙絃」「婦女罵雷」、紀州（「徳本仏相」、京都（「西行庵蛇」「花子の茶湯」）を含むもので、言わば「皇都」を起点とした東遊であった。

中には、芭蕉堂高桑闌更にまつわるエピソード（巻五「西行庵蛇」）なども掲載しており、興味深いものがあるが、とりわけ巻一「中村吉十郎幽霊」の話に論者は興味を覚える。

本話については既に佐藤深雪氏が指摘するところであるが²、後年、山東京伝読本や南北劇に登場した「小幡小平次伝承」の

原型と目されるものである。今、試みに京伝『安積沼』から引用する。その内容を比較していただきたい³。

かくて左九太郎江戸に帰り、たゞちに小平次が家に去、暗に彼が妻お塚を人なき所に呼出して、旅中にてゆくりなく雲平にめぐり合し事より、計をかへ、安積沼に於て小平次を殺しおもひかけぬ金五両を得たるまで、始終をつばらに説ければお塚訝りていふ、「小平次は旅宿にて病を得たるが少し快きにより人に先だちて帰来しとて、瘦衰て昨夜家に帰り、いたく草臥れしとて其假房間に入りて臥けるが、物も食ずして今に起出ず」といふ。左九郎聞て、「そは怪事なり。彼所にゆきこゝろむべし」としてお塚と、もに房間に入り、やをら屏風をひきあけんとす。時に裏より青くほそりたる手くびをさし出し、屏風を押へてひらかしめず。猶しひてひらかんとせしに、裏より屏風の縁にかけたる五つの指、はら／＼とこぼれ落ちて、屏風はおのづからひらけ、裏には人影も見えず。只臥具のうちより一団の陰火まるび

いで引窓を越て飛去りぬ。

（第八條 小平次冤魂苦姦夫淫婦事並五指五金終有報事）

共通するのは旅芝居の役者の死と、それを知る者が、妻子の元を尋ねるといふ設定、さらに、そこで妻子からその役者がすでに戻ってきていると聞き、急ぎその一間を覗くと藻抜けの殻であったという点であろう。典拠とするには躊躇されるものの、同じようにこの話を伝える『海録』『聴耳草』『耳袋』などの写本に比して、こうした話が寛政十三年段階で刊本として流布し得たことを裏付けてくれるのである。

※ ※

作者「一無散人」は、今日ほとんど知られていないが、近世中興期に活躍した京都の俳人、岸丈左、一無庵とも号する人物である。その主な編著書を掲げる。

◇『奥のしほり』寛政五年 半一冊 丈左房一無編

松露庵東海房烏明序（寛政三年）鶴樂齋南陽序（寛政五年）

文鳥序（寛政五年）自序

◇『狭名辺墳集』寛政六年 半一冊 一無庵丈左房編

隨齋成美序・曆亀庵竹冠跋（寛政六年）

◇『俳諧八儂歌』寛政七年 大一冊 一無庵丈左編

自序（寛政七年）連桑庵律大跋（寛政七年）芭蕉堂蘭更跋

（寛政七年）京都菊舎太兵衛

◇『花むつひ』寛政八年 半一冊 一無庵丈左編

自序（寛政八年）重厚跋（寛政八年）京都菊舎太兵衛

◇『な、もみち』寛政八年 半一冊 一無庵丈左編

自序（寛政八年）蘭更跋（寛政八年）京都菊舎太兵衛

◇『発句題苑集』寛政十一年 中五冊 一無庵丈左編

南陽等校・自序（寛政十年）大坂河内屋太助外四軒

◇『高名詞画』享和三年序跋 大一冊 一無斎（一無仙翁）

編 生生瑞馬序・八千里跋（享和三年）京都橋屋治兵衛

丸山一彦氏の紹介する書簡に従うならば（白雄・蘭更及び丈左書簡の紹介）国語国文 昭和二三・六、寛政の初め、陸奥へ下向し、寛政五年七月までに帰洛している。その旅の成果でもある『奥のしほり』の自序等に従い、その来歴をたどるならば、初めは淡々門であったが（「初め半時庵に属して学ひ」、宝暦十一年1761の淡々没後、千載堂丈石門となり点者の列に連なるほどであった（「千載堂丈石に道を習ひ武辺に点廓をつらぬき洛の詞宗の列に入事二十余年」）。安永八年1799丈石滅後は「栗津義仲寺に詣て蕉翁の杖下に随ん事を願ひ生涯蕉門の誓ひを告」たという。云うまでもなく寛政初年からの陸奥下向は、元禄二年、芭蕉が「奥の細道」行脚に出立してから百年目にあたる。「翁世になくなりて百年のとしにあたれるに、俳諧のほそ道たりなれてまたそのむかしをしのへる人等おほき中に、洛の丈左ほふし、翁の杖の跡をしたひ、奥羽の間にさまよひありきて」と夏目成美の記す如く（『狭名辺墳集』序）、まさにその旅は芭蕉を

慕うてのものであったと思しい。五年にも及ぶその旅の中で、丈左は埋もれていたしのぶ文字摺の石を発見し、『狭名辺墳集』はそれを記念して編まれた。文字摺石のことは『東遊奇談』巻四「信夫摺」でも繰り返し述べられている。参考までに「狭名辺墳集」37丁表の文面を掲げておく。

文字摺石之図 白芝山写意

丈左法師かとみに見出せし古きしのぶ摺の石を絹に

染ておくりける嬉しさに

名に旧りて聞しのみなるみちのくの

しのぶ文字摺けふ着そゆらん

右関丈公

ところで、『奥のしほり』自序に「我やことなき卿に仕まつり志を風流の為に官を辞して世をいとひしに」とある。「おもひかえてふたゝひ帰れ大内山花の都の花の春には」といった歌を贈られていることから、薙髪する前は宮中で仕えた人物と考えらるが、詳しいことは残念ながら確認できていない。ともあれ、その俳諧活動の中で成美、闌更（丸山論文参照）、松露庵鳥明（東都に杖を入古き知己なる松露庵に杖を休め）、さらに鈴木牧之や一茶などとも交流があったようである。中興期の俳壇情勢を考える上で無視できない人物である。

※ ※

版本上の相違について若干記す。『東遊奇談』は半紙本五巻五

冊からなる。「国書総目録」「古典籍総合目録」によれば、「国会・東大・刈谷・高木・無窮神習・竜谷・都立（日比谷）諸家・茨城菅・金沢大」に所蔵されているとのことであるが、管見に及んだのは「東大・竜谷・都立」と、架蔵本及び島根大堀文庫本の五点である。島根大本を除き、刊記は次のように記されている。

寛政十三年歳次辛酉初春

八幡屋 金七

皇都書林

萬 屋九兵衛

秋田屋藤兵衛

著 屋儀兵衛

これが島根大学堀文庫本（仮目録番号一八一）では、

寛政十三年歳次辛酉初春

皇都書林

八幡屋 金七

萬 屋九兵衛

秋田屋藤兵衛

品 村太兵衛

著 屋儀兵衛

とある。しかも巻五・十六丁表の「花洛一無散人記」のみ油で滲んだような印象を受ける。その他での相違点はない。

今回翻刻に付した底本は架蔵本によるが、虫損の激しい箇所
の判読のため、東大本・竜谷大本を参照させていただいた。ま

たその内容において不適切と思われる表現なども、時代背景と作品の価値とにかんがみ、そのままとした。

《注》

- 1 板坂耀子氏「江戸を歩く 近世紀行文の世界」(葦書房) 一九頁の指摘による。
- 2 佐藤深雪氏「近世都市と読本」(『日本文学講座5』大修館書店)。
- 3 拙稿「京伝『復讐奇談安積沼』ノート」(相愛国文第8号)がある。参照いただきたい。
- 4 書簡中の「奥のしをりと申編集上巻之方ニ御加へ申置候。此集江都須原や茂兵エ店ニ商ひ申候」の一文をみて、丸山氏は無事庵撰「おくの信折」の刊行年から寛政六年と推定した。しかし同じ書名ながら、丈左房「無編『奥のしほり』」が存在し、寛政五年刊行と類推されている。よって帰洛の年を改めた。
- 5 「やことなき卿」とは前掲引用箇所にある「関丈公」のことであろう。「丈」には年長といった意味があり、そのことから今のところ藤原(鷹司)輔平ではないかと想像しているが、後考を期したい。鷹司輔平基輝男。号後心空院。兼香公養子となり相続。宝暦六年内大臣。同年九月二六日右大臣。安永七年左大臣。天明七年関白。寛政三年八月廿日

辞関白、時に五十三歳。寛政九年出家法名理延。文化十年正月八日薨。

諸国 東遊奇談 奇談

東遊奇談序

おのれさきにもまなひのためにとて鳥がなく東の山くより松浦かたはるけき波のさかゝるまでことさきくらみ山の名ところは更におほかたの世にしられさりけるかた山さとのことまてむらきものころのおよひつるかきりはものしたりしおりふしも海士のかゝるてふめつらしとおもひつるくさく浜千鳥の記はかなくかるしつゝ若干の巻なせりけるかこたひまた東遊奇談てふ文なむそれか類にしてなにかしのものしたりしくまゝおのかさきにもせさりしことゝものかゝつけたるを見ればまたはしめてそのさかゝるにしもいまきたらんこゝちこそすれいにしへにいへらくあし引のみ山にとらされはあめの下のおほひなるはしられしなど侍るにもいよゝこのふみにしてその大なるをおもひしりぬるになむふみ屋のおちかせちにこはるゝまにゝそのよしをしるしてこの文の序とはなしぬ

南谿子誌

東遊奇談巻之吉

惣目録

巻之一

鹿嶋要石并生栖の瓶

常陸砂山

甲斐の野男

伊香保温泉

餌取の孝子

十八坂

中村吉十郎幽霊

巻之二

伊達靈山

栗橋の任侠

狐湖遊女

草隠の術

人取藪

巻之三

筑波山

平瀨遊里

花洲善兵衛

鶴沢市太郎妙絃

くゞり川

巻之四

鬼と仏

天狗瀧

遠近の宮

上野の狼

金成玉打

泣祭

爐中得銭

樁の大木

下総大沼

梁上の鰻并杜鵑蘇生

蛇の内裏

名馬の墳

鯉節の味噌漬

郡司屋敷牡丹

最上川并羽黒山清火

漁人辞きよしのことば

卷之四

駿河藤橋するがのふじはし

白鳥神社并化しらとりじんじや 邪劫棺やわんをねびやがす

輪燈蕊生りんとうしきくそやうす

錦木塚にしきづか

玉子社狐火たまごぢきつなび

天狗呵てんぐかりうどましかる 獵人しよふずり

信夫摺しんぶずり

卷之五

東山西山とうざんせいざん

尿前関しよまへのせき

徳本仏相とくほんぶつさう

西行庵の蛇さいけうあん へび

惣目録終

東遊奇談卷之一

目録

鹿嶋要石并生栖乃瓶かしまかめのいし いさす かめ

常陸砂山ひたち

甲斐乃野男かひのの の お の お の

伊香保温泉いかほをんぜん

伊達墨塗だてのすみぬり

石巻貞婦いし巻のていふ

清好七日詣きよこう なな まい で

佐藤車松さとう くるま まつ

獵戸怪異れつこのくわい

六百載の男むももせいのおとこ

婦女罵雷おんなのののしる

花子の茶湯こしき ちやのゆ

鬼と仏おに ぼつ

天狗瀧てんぐたき

遠近の宮えんぢん みや

餌取の孝子えとりのかうし

十八坂

中村吉十郎幽霊なかつむらよしじう ゆうらい

上野の狼かうづけ おの お の お の

金成玉打かねなるたまうち

東遊奇談卷之一

鹿嶋要石并生栖乃瓶かしまかめのいし いさす かめ

あられふる鹿嶋のおほん神はたちばなの小戸のしほ瀬にあらはれ日のもとひんがしにあとをたれたまひきとや階門いやたかく龍神守護のすがた前後に立てよのつねの作ともおぼらず古の杜御手洗むすび松すへなし川のすへなき水の行衛こそ不思議なれまたかなめ石の根をおゝなの穿ちけるにおのが産べき子のかぎり虫いでゝ胤なき女の手にはかならずむしの出ざるとなりなげ櫛なげ針といふ事あり齋宮に立せ給ふ御子の親子別々のぞみて池水をへだてくしをなげはりをなぐる事なり此地を神宮沢といふ神秘の所なりとぞ神殿のかたはらにふるき藤あり鎌足公のむかしより今につゞきて藤が丘といふ藤原の源とかや境内に躑躅ありことく見あくるはかり大木のごとく成て花更に赫々たり常陸帯の事予三位大宮司に近よりし頃ひそかに其ゆへよしを探るに世にいふどは事かはりたれど神秘なればあらはしがたしはより一里ひんがしにあたりて生栖の神社あり前に利根の天川ながれてこれを瑞籬とす東海銚子の口より潮さしのぼりて流水をおしもどらすこゝに雄瓶雌瓶とて大なる壺二ツ

水中にありいつの代よりかくしづみけるにや其いにしへの事つまびらかならずかたちは生るがごとし其辺に棹さしてこれを見ればたちまち身しゞまりてうごくことあたはずいとおそれありとて拜伏して去るされば満潮なんくゝたるときだにも此瓶のうへのみ清水ながれてすこしも潮の交らざるはこれ不思議ならざらんや

常陸砂山

生栖の神社を去事三里海手につゞきて名におふ常陸の砂山ありうしろには東海蒼くとして前には利根のながれなんくゝたり白砂積んで山となりさらに一草木なしはるかに見る白雲峯をなすに似たり夏日炎天に此ちまたを過るやいなや足をこがし踵を焼んとす山のすがた須臾に変化して時々刻々更にきはまりなし名画たりとも空しく筆を投んの絶景なり白艸生じ白刃折るゝ鷹門の地とは寒暖の相違あれどもおのづから風土似たらんやといとうたがはし

鬼と仏

鹿嶋二階町とかやいへる所に鬼藤治仏六平とて二人の男ありつねにむつまじきあまりかねては伊勢参宮と名づけ西国巡礼をかけて上之方見物にいでんと約しけるころは過にし如月ある日宿を立て先阿波香取にまふで直に江戸に出てこゝかしこ見めぐるうちたがひに何かはらあしき事の出来たりけん一ツふたついさかひて後不中になりそれより江戸を立て伊勢より八鬼山越を

熊野にいで高野山紀三井寺粉川槇の尾などまふでつゝ三十三箇所はいふにおよばす見ぬ名所しらぬ仏閣くはしくめぐり終りて本国鹿嶋にかへりけるが江戸にてもいひたるまゝにて寝るにも起るにもすべて一言の応対なく百日あまりを無言にて長のたび路を事なくかへりたるはおかしくもまた目出たれきさてかれらが道すがらの事をくはしく聞にけふは仏がさきだちて湯にいれば仏のあとはいまはしとてぶつゝひとりごとといひて入らず翌日は鬼めにおくれたりとして鬼のあととはげがるゝとやらいひて湯に入らず鬼が馬をはしらせば仏も馬をいさめ仏がたゞずめは鬼も休らふある時鬼昼寝しけるうちに仏先へゆきけるがやがて目覚て今のおのこはいづちへ行けるやとも問はざりければ主ジいぶかしくおもひ各はいづれの国に人にやとたづぬればわれは鹿嶋の鬼也とこたへけるあるし大きにおどろき顔うちまもりしとなり又ある時鬼さきへ宿に着けるをほとけは知らず行過るにあるじ心得あれはお連にてはなきやと尋ねければされはこそ其様なことにてもやとこたへたりしとなん其後友どちうちより中直りをぞさせたりける（挿絵）

甲斐乃野男

甲斐乃国より富士山をのぞむに四月中ごろより五月中ごろまでのあいだに山の半ふくの雪日く消行にしたがひ夏至以前より人のかたちに残りて笠をかぶり蓑を着つゝ、鍬を肩にしてまさに歩みをはこぶさまありくゝとあらはれ出るなり此かたち見へ



初るよりさらば野男の出けるぞといひて甲斐の一国田のうへ付
をはじめ代をぬり苗をとりて万家一同に時をさだむ年々のこ
となりとぞ吾その比此国に杖をひきこれを見るにまことに糸が
くとも及ぶべからず

天狗瀧

上野の国草津の温泉に行ばやと信濃の国追分の駅より浅間山
のふもとを通るに先年もへ出数ヶ村ながれうせたる後わづかに
五ヶ年を過ければ草津まで十里のあいだは砂諸木をうつんで草
木なし一鳥きこへすけふり吾うへになびきて時々焰燃あるひ
はきえて朧夜をあゆむがごとし山の半腹をのぼりて細道をゆく
に吹いだせし大石小石とも踵をこがすばかり足もとに煙りて水
一滴わきいづる所もなく小家にひとしき岩石ひゞきわれたるあ
いだより火炎出て枯木のもゆるがごとしこゝに焼石をもて造り
たる家あり見れば親子五人の住居なり吾つらく思ひけるは鳥
もかよはぬ山中にとなりもなき孤つ家をおのが栖としたまゝ
行通ふ旅人に茶水を売わづかに命をつなぎ何をか子にゆづり末
のたのみやありつるはた此ほとりは過つる年おびたしく
火石飛落火水津波のごとくわき出たる所なり其うれへ未忘れざ
るうちに又もやかゝる栖をむすびて妻をもち子をやしなはんと
するこゝろまことにさゝ蟹の軒端に糸をはり巢をくひてやがて
破れんことをしらざるに似たり是非もなき世わたりやとひとり
泪をおとしほどなく草津に着きて此地はまことにたなごゝろを

くぼめたるごとくあたりに山高ふして其中に温泉の壺あり池一面にわきいで、煙り天をくもらす方四町ばかりの大池なり其めぐりをとり巻て家居あり池より落来る瀧十三あり第一ばんの瀧を天狗瀧となづくたかさ五間ばかり幅五尺にあまれり其音山も崩るゝことく湯けふりたちて風情凄じかりき湯のわきいつる壺八ヶ所ありなかんづく綿乃湯といへるは和らかなれど此湯のとばしり浴衣手拭などのたぐひにかゝればやがて腐るといふ長く入る人は惣身たゞれ金銀銅物のたぐひはすべて墨のごとく錆てあやなく見ゆるなりされども名湯にして難病ごとく治す又湯にあたりて死したるものを捨る所を地獄谷といふおそろしき所なりこれより善光寺へ七里のぬけ道ありきはめて難道なりかゝる辺鄙へむかし近衛龍山公下りたまひて御詠歌十二首ありわきて瀧の御詠を秘蔵す薬師寺といふ所の什物なりされば十三の瀧は弱きより打たれて強きにのぼるをほまれとし次第に大瀧へうつりうたるゝなりある人夜々第一の瀧へ通ひてうたれけるに老僧一人これもおなじころにきたりて出会たがひに熱湯の大瀧にうたるゝあらゆる事など云あふていとねんごろになりけるが此おとこ加州金沢のものにてふるさとにこゝろがゝりの事ひとつありこれ逗留のさはりなりよつてひとまづかへるべきなどこかたりければかの僧これを聞て此おのこの手をとりにてはやくいそぎ給へといひつゝ引立けるにいづちへかつれ行けんその夜は宿へもかへらざれば家来のおのこうへを下へと尋ねけるが夜

もいまだあけざるうち軒端に居るをかきこみ見ればものにさそはれたると見へて正体もなくうちたふれふしけるやうくこゝろたゞしう成て後問ひければかの僧瀧のもとより本国金沢へつれゆきこゝろがゝりの事とくと、のへてまたつれ帰たりとなりさてはその老僧こそ鼻の高き人なるべしときくと皆おそれて天狗瀧の名は高かりけり

伊香保温泉

上野国榛名山の山つゞぎに伊香保といふ温泉あり伊香保の沼と歌にもよめる大池に隣て山の半腹なり湯のわき出る事大川のごとし一里あまりふもとなる人家に湯船をしつらひ瀧をもふけ諸客をとめて世わたりとす此温泉いろはたゞ濁りにしてあぢはひ清水のごとしにほひ少しもなくまさしく黄金湯なるべし湯の能あたゝかふして気血をめぐらす我しる寒あり此湯に入てつひにすこやかになるある時此地に一人の乞食ありてさきにはあしなへなりしかど毎日此湯の末川につかりてすてに本ふくしたりまたこゝに不思議なるは煮へ湯のごとき中へ枯しほれたる草花を入るゝにたちまち生かへりて花盛んなり追々苔ひらき葉を生じて根のあるがごとしいとめでたき温泉なりけり

遠近の宮

信州追分の駅を少し過て何とかやいへる一村ありこゝにちかき比おちこちの宮といへるを勧請して社頭きらびやかに花美をつくしたりされば諺に信は莊嚴よりと人々尊みうやまひて願ひを

かくるにもろくの事ひとつとして利生なきはなし、いよく神徳まさりて参詣貴賤群集をなし宮居市をなすの惠日定りけりそもく此神を勧請せるおこりをたづぬるに信濃なる浅間が嶽にたつけふりおちこち人のみやはとがめんといへる歌を神体としておちこちの宮と唱へ奉るとなん予つらく思ふに此うたにいふおちこちのみやはやはいふてにはにておちこちに往來する人の此煙を見たらばとがむるであらんいやとがめはせまじといふ事を見やはとがめんと詠したるにてこそあれざるをおちこちの宮と心得て勧請しけるが世はみなこゝろからにて信あれば亦利益もあるものとおもへはおかしくもありがたくこそ覺ゆれ

餌取の孝子

信濃の国鼠宿といふ所に隣て小さき一村の見へけるが孝子何がしと名をあらはし道端にちいさき札をたてれば見ぬ人のなつかしき心地して其わたりの茶屋に立よりたづぬるに餌取村の貧者なりと聞いていよく感じて行状を聞に父は目しして七十にちかく娘ははたちに三ツばかりも過つらんと朝暮のけふりたえくなれば日ごとに父を背に負ひつとに起き町にいで、人の門くちにてちちてほどこしを受く夕には山に行て柴を掻き木の葉を拾ふ此ときもまた父を負ふて便りよき所におろしこゝろをなぐさむ寒き夜は爪先を己が肌へにあたゝめあつき日は団をもつて涼しめ夜もすがら蚊をはらひよるづにいたはりつかふまつ

る中にも太鼓の音をいと恐る、病ひあれば本坊の時をうつたびく、に他所に負行てその愁をまぬがれしむかくておのれは飢をしのぎ父をあつくやしなひける此事きこえて領主よりの建札をたまはりけるとなりかゝるいやしき家にうむれて孝子の名を揚るゝとはまことに天の道なるらんか

上野の狼

上野の国赤城山のあるかたに高平奈良なごいへる山中ありやがて信濃路にこへんとする境なり此わたりの墓所人里ちかしといへども白昼に狼いて、うづみたる棺をうがちておのが罅へはこぶことありいかゞしてもて行にやと問へば狼二足来りて土中よりほり出し一疋は棺を背にのせ頭をふり向て桶の底を喰はへ一疋は横よりかゝりて背にしたる桶のゆるまざるやうに附添ひ横つらを喰へつゝ、こゝろを合せてはしる事いとやすきしほざなりまた亡骸をもて行には足の爪先をくはへかしろのかたをおのが尾のかたへなして背にふりのせはしる事申々人もおよはざる自在なりと所の人のかたりける

十八坂

上野の国十八坂ときこえしは坂東太郎のみなかみにして沼田へ越ん大山なり十八の難道をこゆるゆへ俗に此名を呼とかやいた、き雲霧に隠れて旅人のあとをうづむ利根川の流れ薄ること眼下に臨みてすさまじき險阻なり時々此わたりは白昼にも賊いで、人をおびやかすとなん予こゝを過るころ究竟の若もの二

人かの細道に寝ふたがりて往来をさへたり進まんとするに道なくもと来し方にや帰らんとよくくおもへばかゝる毒蛇の口にむかひて今はかへるともゆるすべからずさればとて道ふたがりければいかんともすべきやうなしとまれかくまれ雲水の身のかれらために命を失はんも是非なしとこゝろをさだめかの賊どもがふしたるうへをエイといふてとびこへければ二人ハ眼をひらき吾を見てまたもとのごとくねふりけりあなおそろしき目にあひけるよとやうくこゝを過て

つめたしや命のさきの秋の風 一無斎

金成玉打

奥州仙台より二十里奥南部街道に金成といふ駅ありむかし金売橋治住ける所なれば金生と書しを近き頃成の字に更めけるとぞ此所に橋治（挿絵）櫃とて大さ筆柿のごとくなるありこれ橋治か居城の旧跡なり地をうがてはことく土に木の葉の形貝のかたちあり矢の根石あまた出る此わたりの川今に砂金流れて水中きらめきわたるなりさてこゝに春のはじめいぶかしきあそびあり何にてか玉のかたちをこしらへけん其中へ焰硝をしこみ投るときは火の粉飛で花火のごとしこれを人にうちかけて袖襟にひきかゝるをふるへともはなれずして火は猶さかんにもへあかる是にも又手便あり敵味方と引わかれ一村くそのなへをたて忽勝負を決するなりかねて遺恨あるものには不意をうちかけおどろかしうちかけく入乱れ命もあやふき次第なりとぞかの



印地打に似て猶おそろしき事申も中々おろかなり又幼児のはふれにかつくといふ事あり檜櫓の木のたぐひをほそくけつりきつききをどがらしてこれを地にうち合向の枕を転ばしておのれが枕の地にたつるを勝と定めていどみけるまことに古雅にしておもしろきあそびなりき

中村吉十郎幽霊

中村吉十郎はじめは染松七三郎とて歌舞妓芝居のやつしかたなり此もの七三郎といひしむかし同僚に中村吉十郎といへる敵役者ありて無二の中よしなり兩人ともいまだ年若なれば田舎わたらひしてたかひに貧苦をたすけ合しにある時吉十郎より妻子かもとへ金子十斤贈りけるを七三郎ことづかりけるが若気のいたりふと田舎遊女につかひはたして年月を過し等閑に戻さざるうちに吉十郎は安芸の広島辺の芝居にまかりて川狩に出あやまちて水におぼれ命をうしなひける七三郎は四国辺より都ちかく上り播磨の浦辺に宿をとり磯山のけしき面白しなどいひて召連たる一人のおのこと酒宴を催し夜ふくるまで遊びけるがおのこは次の間に臥ておのれは塩風涼しき障子あけながらひちまくらして休らひ居りしが浦浪しきりに音してはるかの沖より妄執の火吾方ちかくより来るをこはおそろしと眼を閉てしきりに御経をとなへければやうく浪おさまり火消て何の音もせざりしが躰て吾目のまへに吉十郎が姿あらはれ出汝いつの比かわだかまれる金子何として戻さるやもしすみやかにもどさる

におひては立所にもうしうの雲にいざなふべし我あやまつて水におぼれ命をうしなひたり汝もし我妻子の飢渴を思はゞかへせや／＼とせむる声に七三郎あつとひれ臥た、御経をとなへつ、これかぎりなきあやまりなりいそぎ其金をもどすべしまた我命のあらんかぎりは汝が妻子をやしなひかまへて流浪はさせまじきぞゆるせよや吉十郎うかめよや出離菩提とくりかへし唱ふるうちたちまちすがたは消失けるかくて明くる間待かねはせのぼり先妻子か方をたづねけるに吉十郎此比田舎よりかへりて大病なり一間にすや／＼休みけると聞てふたゝび肝を消しかけて入れば病ふの床には人もなくたゞ抜がらの闇ばかりなり妻は大きにおどろきて今まてかたはらに介抱せし夫の行衛なくなりしはいかなる事やいぶかしく歎きになげきて問ければ始終の次第こまやかに語りなくさめ妻や子を終に家屋へ引取てかの亡霊かなきあとのまよひをはらさんためにそれより我名を改めしとわれ陸奥水沢に杖をとゞめし時かれも同じく居り合ひそかに吾にかたりける

東遊奇談卷之壹

東遊奇談卷之二

目録

伊達靈山

泣祭

栗橋の任侠

狐溺遊女

草隠の術

人取数

爐中得銭

樁の大木

下総大沼

梁上の鰻并杜鵑蘇生

東遊奇談卷之二

伊達靈山

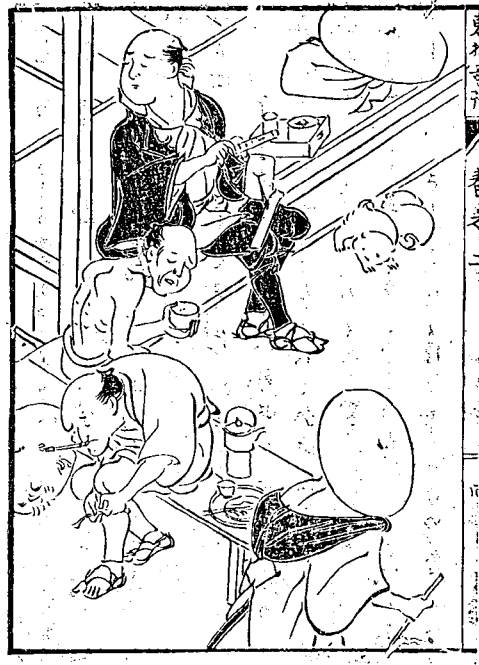
伊達の靈山といふ大山あり仏地法座の究竟にして天竺娑羅双樹にもことならずとて昔聖のかく名づけしとなり桑折福嶋の岐より東南に黒雲のごとく天にそぼたち万仞ことく尖りて鋌をうへたるごとしふもとよりのぼる事五十町にして平かなる所あり草の一字に觀音薩埵葉師ナニ神將を安置しかたはらに山王権現をまつる此所より二十町ばかりにしていまだ行先を見ず風は雲のごとくなびき浪のごとくすさまじく吹て此愁へにあへるときはたちまち虚空に身を飛し命をうしなふたまく廻峯する行者の天狗のためにさそはれしなどいへるも多くは此難に逢たるなるべし木の根岩陰に匍匐してしばらく過れば此うれへをまぬがるかしこに羅漢石といふあり大石ことくく菩薩のかたちおのづからありて見あぐる事山のごとしこを過てやうく踵を入るばかりの窪みを伝ひてかたはらはあやふき深谷なり木の株藤かづらなどをもてのぼれば南面に山なく相馬海上を眼下にのぞむ一穴あり前は谷底まで繩を引がごときおそろしき半腹なり上

より大石覆ひかゝりてほどよき護摩壇に作れり更に人力の業とも覚えぬいにしへ智證大師籠り給ひしとて護摩の炭灰のあと遺れりこゝを去て蟻のとわたりとて細道あり左右に幽谷のけはしきを見て行程壹丁目ふれば忽千丈の底に落ん難道なりやがて道絶て少しき幅を隔獅とひ岩といふあり谷底よりたち上りたる大石なりいたゞき掌をひらきたるばかりの平みありてこなたよりかなたへとびこゆる行場なり其間の幅三尺にはみてずといへども柔弱のものは肝を消したましるをうしなふ嶮岨なりされどももと来しちまたにかへれば五十丁ばかり山をめぐる費ありこゝをこゆればすみやかに本道うつれる事たよりよしとて伴へる僧はすでにとびわたりあつと耳をふたぎうつぶさまに伏たりけりおのれものがれがたしと命を風雲にまかせやつと一こゑとびけるにあやまたず僧がもとへたふれたり大石雷鳴して根より崩るゝかと肝を銘じ天地もくつがへるかど覚ゆ廻峯行者の一難所これなりとぞ聞えける

泣祭

奥州平泉は衣川に隣りて秀衡の古跡なり泉三郎錦戸太郎が古城の址あり三衡が栄耀たちまち亡びて川破れ山綻び今は名のみ残りりこゝに前鎮守府將軍基衡室安部宗任女墓とて苔むす碑あり四月廿日里人これを訪ひて各白き衣を被り男女打むれて踊るなり俗に泣祭といふ

栗橋の任侠



日光街道くり橋といへる所に角屋の何某といふ角屋敷引まはしたる旅人の休み茶屋あり此家の妻女娼かたち人にすぐれて愛寵よく気さくなればことさらに名高く賑ひけりこゝに江戸本町何某の手代嘉蔵といへるもの幼年より旧功なして首尾よく主人のいとまを乞ひ本国下野鹿沼といふ所へかへる道すじなれば角屋に足を休めたべものなどと、のへつゝ妻女が艶色に見とれて腰をぬかしすでに時をうつしけるが妻女の手まへもきのどくと思ひきりしほく笠をかぶり調度のもを背になして出てゆくはや日は西山にかたふきこゝる朦朧として煩惱のおもひますくさかんなり四五町ばかり過れば月代所ありこゝに入て髪月代などしつゝかの女の行状を聞ばきはめて貞女なりといふさてこそとおもひ此所に口利男達或は訳しりのたぐひなどありやとたづぬれば関東屋五郎とて通りものありこゝの出入かしこの喧嘩などはいふもさらなり何につけ角につけいかなるむつへ挿絵かしき事も此男をさへたのみてとりあつかへば誰にもあれいなといふものひとりもなく一寸もあとへ引ぬ人のよく知りたる男なりこれより二丁ばかり南に関東屋といふ宿屋なりとかたりければ嘉蔵よき事を聞たりとかの五郎が宅をたづね行先こゝに宿をとる日暮て酒肴などとりとゝのへあるしを呼でちかづきに成り其後声をひそめていふ我は江戸本町何某がもとに幼少より廿年の奉公して此たび親里へかへるものなり何を隠さん角屋の妻女を不斗おもひ初てまことに一命もくるしきほどなりさればとて

人の妻女に邪のおもひをかけんことそらおそろしと我ながら心をいましめ仏神にちかひをたて、ふつ／＼思ひわすれんことをねがふといへどもたゞまぼろしに見へて恋慕のこゝろを止みがたしこゝに主人何がしより金子百斤親の跡を立るためとてもらひ又外に年比溜置たる金子三十斤ありねがはくは此三十斤の金を彼女につかはし何とぞ一夜ひそかに吾念をはらさせ給はん手だても有間敷やとそこの御ん氣質を見込んでかく大事を明し申なりあはれ御身よきにはからひたまはれかしとわりなく申ければ五郎吐息してかしらをかたづけ手を組でいろ／＼と思ひめぐらすに世の中に色に迷ふといふも人の花にこゝろをかくるもなきならひにはあらねどいとけなきより鶴の粟をひろふごとくためたる金にかへてもとおもひつめわれを頼めるこゝろざしおしはかりおもはずかんるいを催せしなりまづこよひはまち給へあすはいかにもすべきなどいひなくさめ納戸のかたへ出けるがまことに人の命をうしなふ事は恋路のならひなれば今宵のうちも氣遣ひと思ひやかて角屋へはしりゆきあるじにまみへこの事をひそかにかくと語りければあるじは思ひもふけぬ三十金に心くれともかくもとうちうなづき妻をまねきいひ聞せはもつての外に腹立しあるじをのゝしり恥しめ涙ながらにあらそへばいろ／＼と理解を説おとしすかしていひふける是非なく妻女は泣く／＼も五郎が宅へ行けるに五郎足ばやに我家へかへり直に二階へともなひてかのまれびとに引合せおのれは一問へ退きけり良

更過るころかの女二階より下りて五郎をおこしければ何ごとかはとおどろきて立出るに女しとやかに手をつかへて云御身今宵の媒にてはからぬ縁をむすびたり吾つらく思ふに夫何がしはむまれつきいやしくかくまでもこゝろつれなし二世かけてつれ添ふ妻をだにかくのごとく人手にわたし否といはゞ去るべしなどいひてこゝろたけ／＼し今にも今宵の金に一倍して斯といふ人あらばそれにも心かたむくべしさるにてもかの客人はそれに引かへそこばくの金を我為に費し身にあまれる真実をつくし給ふ心とは天地黒白のちがひなりされば人の一生は身を修むる外なしとても女の操を立るならばかゝる実ある人と夫婦に成にはしかじ急ぎ夫のいとまをとりわがねがひをかなへてたべきもなれば五郎は道理にかんじ入男泣にさしうつむいて居たりしがげに尤と思ひつゝ、今はとゞむるともとゞまるまじされども心よくいとまはいだすべからず我思ふむねあれば夜あけぬうちに落行べしかまへて氣遣ふ事なかれとやかて二人をおとしやり始終の様子こま／＼とかき認めて金子をつゝ、みのこし置終に五郎は腹切て死たり天晴男一疋とおしまぬものはなかりけり

爐中得錢

下総の国八日市場のとなり横須賀村といふあり此所の百姓さゝ尾林兵衛がもとに年七十に餘れる一人の老母あり常々孝行につかへけるがある時老婆居裏の灰掻といへるものにて

炉中の塵をはらひけるに何かは下より灰のかたまりて出し中をかきさがし見れば乱れたる錢二百文ばかりあり誰かは取落しつらんと拾ひ集め家内のもに斯と告るれども更にうしなひたるものなしは不思議なりといふに又老婆の灰搔を手なぐさみして居りけるにこたひは灰の底より夥敷錢かたまり出て人々もおどろきながらもにさがし見るに老母がさがすかたよりはいで、他の人のさがしけるには一錢も出ざりけり弥不思議とおもふうち隣郷遠里よりも聞つけて是を見に来る人引きもきらず日々老女の掘出したる錢を俵に入あるは桶に納めやがて此趣を訴ければ古き野狐のなす業にやと捨置れけれどさのみはあやしき事にもあらで追々にいづる所の錢数十俵をかさねたりされば其家富たらんとたづねければ其ころはさりととも見へけるか老女身まかりて後はさのみにもなかりしと人のかたりける

狐溺遊女

下総国松岸といへるは鹿嶋より七里あまりの船路を経て銚子となりたる舟着なりさるから繁昌の土地なれば高砂屋蓬萊屋とて大なる娼家あり元より蓬萊高砂の二つは松岸の名によりて号たらんか後には山を帯前には海をのぞみて絶景の楼あり此つき一里にしてかの銚子といへる湊あり万家軒をならべ棟をそへて商家おびたしく大船岸をふさぎて殊更に繁花の所なりこの松岸の遊女歌舞伎の身振よく笛太鼓つゞみ音曲都て三都に劣らず座敷に舞台を仕込すは大臣の大騒ぎといへる時は一面に取

放しあまたの遊女おのゝ出てもろくの芸をはじむるなりまことに名ある芸者も及ぶまじき上手あり中にも此さとに名におふ嶋之助といへる遊女は媚かたち人にすぐれこゝろはなやかなりこゝに不思議なる事あり年わかき狐の心をかけ凡俗の姿に身をやつし終に浅からぬ契りと成て露の情に天眼通の鑑も曇り火宅の戸をひらき不淨の窓をくゞりて遊女が影身に添ひ愛着の迷ひに引れて雨の夜雪の夜もいとはず夜なくかよひけるが遊女露ばかりも夜のあるじといふことをしらすそもく聞中にはじめより心蕪分として終に濁海の深きにしづみ君ならずしてたれにか閻羅を解など思ひつゞけすでにれんりのかたらひをなし行水のあはでくるしきつれぐのあまりに高雄といへる曲を弾目も合はで夜更るまでこしかたゆくすへの事など思ひつゞけるにいづ地ともなくもの音して恋しきかげのありくとかしこにうつりければあはやとかけ出いだき入いつものわかれまで契りてかへせしが其後いかにしておとづれもひさしかりしがけふはきのふとなりあすはけふとかはり日を過すうちに例のよい機嫌にて入来れば遊女はからうして外の座敷をしのび出階老同穴の枕を並べとろくとねむりける夢心に我汝に思ひをか三とせの月日もあだに忘るゝいとまもなし今は何をかつゝむべき我は当国松崎の稲荷の神につかふまつる狐なりこたび江戸まつぎきの神社を守護せよと父の命をむきがたしもとより一社の神を仰るゝ身にてあいじやくの道にけがれん事勿体なし今

よりはかよふまじはまでなりや名残ぞとかしこのかたへたち去りしと思ふに目覚て見れば枕のみ残りてあとなし遊女かぎりなくおどろけどもまたかなしみのなみだせきあへずかれよこれよとまどひあるきておろかなる事どもいひならべなげきければはるかにとをく一こゑきこえて姿は見せざりしと遊女が後のはなしなりける

樁の太木

上総下総の境にむかし大なる樁あり其もとをめぐるに時をうつすと南総の古凶に見えたり枝葉さかへ根はびこりて其木陰南北沓里にみてり此枝葉の上へ振たる方を上総といひ下へ振たる方を下総と名つとかや凡もの、寿は限りあるものから終に其木も枯はてければ根をくつがへしうがちけるにあと大なる湖水と成て南総の通船をきはむる事や、久しきを近年開発して耕作おびた、しく民家あまた建ならぶ俗に樁新田といふされば其いにしへうがちすてたる樁の木今に東海の沖中にたゞよひ風波大に荒るゝときは必海上に浮む通船の人足を見ればきはめてあやかしありとて懼恐るゝとなり

草隠の術

常陸の国潮来のかたはらに近方といふ所ありこゝに閑澤何がしに仕ふまつる年老たるおのこありむまれつき正直なれば世のなり業も得覚え露の命を人の奴と成て生涯をくらし翌日の貯へを思ふ罪もなく一衣を飾(挿絵)気もなし只うかくと年をか



さね正直太兵衛と名を取て五十にあまる男あり此比草隠れの術といふ事を覚えたりとてこれを身の芸と人にも風聴し折々の所望にあふて此術をするにかばかりの正直ものを營そしりてなぐさみしよりおのれもよしとこゝろへて頻りに此術をしけるとなりいかなる事にやと尋るに何かは文を口にとなへゆびをまゐめて其中へふつと息を吹込でさらばたづねて見給へと己がすがたかくれたりと思へども其術いまだ熟せざれば更にかたちはかくれざるを人々笑ひをふくみつゝきせる扇のたぐひにてたゝきたつれば身を小畳にすくみ居て口を閉じ目をしかめさまゝとなやみけるをあるひは顔をなで耳を引どかの術の修業なりとしはし苦痛をしのびけりあら笑止の事なりと所の人もかたりけるこれらはひとへに此術をさづけし人の咎なるべし

下総大沼

下総の国に手が沼といふ大澤あり水面縦横二里に満て緑水渺々たり鴻雁鴛鴦時をならべ万魚おのゝうかび出て網裏愁をしらず小船行かよひて南総の便りを助くざるを耕地開発の事おこりて水を涸し芦葭を断あまたの人のちからをつくしてこゝを堰きかしこをふせぎ終に平原をならす此とき俄に雨くだりて一夜にもとのごとく満水す日をかさね身をくだきて事やうゝになれるがおもひもよらぬこゝかしこより水涌出浪さか巻岩を裂山を破るこれをふせがんとて人々鋤鋤其外さまゝの農具を引さげこゝを専と飛込かけ入は蟹泥亀鰻のたぐひ集りて股をさし

足をくらふ又ほり上たる土泥の中よりもろゝの雑魚あらはれ出往来の人に飛かゝりなやましければやがて開発の事は止にけり

人取藪

下総の国八わたといふ所の道はたに小深き竹藪あり俗に人取藪といふ此藪に這入し人はふたゝびもとへかへらざるといひ伝へしがむかし隣国に聡明の君おはしましけるがこれを聞給ひみづから這入て又もとへ出たまひしとなりこゝに若きおのこ酒に酔たるまぎれ友どちと賭ものして此藪に入て出たらば何を振舞やなどたはふれつゝ這入けるが終に出ざりけりさればこそとおどろきさまゝとすれどもいとおそろしき藪なれば這入てさがすべきやうもなく犬を追込礫をうちあるひは藪の外よりかのおのこの名を呼でしきりにたづぬれども何のおともなくかたちも見えず山伏僧をたのみてあらゆる祈祷などすれど終に其しるしもなかりしとなりかのいにしへかしこき人のはいりて出給ふと云もたしかなる事にはあらじよしやまことの事にもせよこは凡ならぬ君なればへんげ化生の業にあやしき神の手にもいかであふべきやしかるに大俗として其真似をしむかしより魔所といひつたへたるあやしき所に臨んで命をうしなひたるは世にいふ馬鹿ものなるべきかおそろしき藪なりけり

梁上の鰻并杜鰻蘇生

下総の国木おろしといふ所は江戸より十里ばかりひがしに当り

て鹿嶋香取の神まふでする船着なり利根川の縁にて是より鹿嶋へ十六里の川船あり此地ともすれば洪水出て市中を船にて往来する事まゝあるなりかゝる時にや住うつりけん梁の上を這歩行蛇のかたちにて似て蛇にあらざたけ短く太き事大竹のごとし桁をつたひて鼠をあらし終に引くはへてくるしめるを主見つけて弓の上筈もて突おとしよく見れば鰻なり身は煤に染りて何ともわかたざるおそろしきすがたになりて眼光り耳長くのび歯白くとあらはれ出て更に鰻とは見へざりけり水をはなれてなどかながらふべきやと思ひけるにうなぎは煤を食すれば齡ひながく水をはなれて生るものなりとぞ又ちなみにおもひいつる事あり吾しれる江戸蔵前の何がしがもとに一子ありある時疱瘡のまじなひと陸奥よりほとゝぎすの死たるを貰ひ筆筒の底へ物につゝみて入置しが何となくものゝにほひうつりてあしかりければもし虫やわきつらんとあたゝかき縁先に出し干けるが次第に日のぬくもり入てたましゐをかへしいづちともなく飛行たりあるじおどろき人々にはなしければ松前人のいふすべて雪深き国には秋より冬のあひだ塊に入てたましゐをうしなひ春ふたゝび生かへりて夏こ糸を発すとなり此ほとゝぎすもつちくれにいりて死したるをひろひみちのくより贈りしものならんとおのく申てわらひけり

東遊奇談卷之二

東遊奇談卷之三

目録

筑波山
平瀧遊里
花洲善兵衛
鶴沢市太郎妙絃
くゞり川
漁人の辞

蛇の内裏
名馬の墳
鰻節の味噌漬
郡司屋敷牡丹
最上川并羽黒山清火

東遊奇談卷之三

筑波山

にいはいりつくばをすぎていくよかねつるかゝなへてよふはこ、のよひにはとをかこは古き神の統歌なりそもく筑波山のかたちは陰陽二柱の神の御姿にて天地いまだ混沌たる秋津洲のひんかし日立の海より生れ出たる御山なりさればにや筑波の名はありけりいたゞきは雲をつらぬき霞にそはたつて壁面を上るがごとく足も及ぎる所には鎖をのべて岩に薦のからめるがごとしあるひは大石我上に落んかといとあやふき胎内くゞりをのぼれば海のみどり川の流れ遠き高根の雪の気色までも手届くばかり眼下にながめて風景に腸をたつこゝを過てしばらくのぼればかけまくもかしこき諸々の神たちの宮居おはします中にも太し

き二柱のおをん神は左右の御高きかたにたゞせ給ふ一つの御峯は陰室のかたちにますく似て大地よりいたゞきまでたてつらぬきたる岩なりまた一つの御峯は陰門のかたちにいよく似て両峯合体の御形なり是を男体女体といふ此峯の間より岩水の涌出る清らけきをみな川の川といひつたへける雫の田井裾野の田井も此ほとりの苔井なるぞかし

蛇の内裏

みちのく栗駒山の奥に温泉あり吾此所にのぼりけるに人足及びがたき嶮阻なれば樵の背にたすけられ又は岩根を飛藤かづらをつたひて上る事三里なり根笹茅萱にてかこひたる仮家をもとめて雨露をしのぎしばらく温泉に遊びけるこゝに蛇の内裏といふ事ありわれも人にいざなはれ行て見るにまことに宮殿のごとく山の半腹に横十間ばかり高さ二間あまりの洞有手を持て塗らるごとく軒口破風の類ひありておぼしき欄干いづれも奇麗に奥深き穴あり山の懐みな蛇の住る洞なりとぞ前にどうくと落る滝あり其流に古き木の葉うちかさなりてありけるを踏て渡らんとせしが下より蛇の出る事数十足彼へ行んとすれば又数十足左右へわかれ山に上りおのく逃去りぬあら気味あしき所なりと足ばやにこそ下りける此あたり鍾乳石あまたありて氷柱のごとしこゝを過て又温泉ありいとさかしき溪谷より嵩山に上る此ちまたはかりなき難道にして後掴前掴といふ大山を右に見栗駒鞍掛山を左にとりて雲にのぼるがごとしされども山人は鳥

のかけるかごとく速にいたゞきにいたるさて此温泉に遊ぶ人は松の戸杉の片庇によりそひて茅がや蓬生の根を枕とす予も友どちと小笹ふく飯のやとりに露置袖をかさね合ふて孤狼の隣に隣れるも実雲水の身はさる事ならめと思へばいとおかしき事なりけり

平潟遊里

水戸のたれく四五人ある日ひ合せ船に乗り釣をたれて遊びけるが俄に難風吹てどこともしれぬ遠きわたり吹流され雲より外に目に見るものもなき大海のあら浪に木の葉のとき小船をはるかにうちあげうちおろし浮つ沈みつ漂ひてからき命の中よりもあらゆる神仏に祈誓をかけたゞび本国にかへし給へと大音声に呼はりて念するかひもあら浪に三日三夜もまれつ、精も力もつきはて、各半死半生にて今や此船くつがへり浪の藻屑となりはつるかど男泣に泣けるが浪挿絵風漸しつまりてほのかに月代さしのぼりゆらく流れ行けるがはるかむかふをうち望めば火影細くと見へけるに少しは心うれしくたとへ何国の浦にもせよ人さへ住る国ならばそれにたよりに命をつなぎふたゞび目の本へかへらん事をたのむべしと火影をさして船をやり難なく岸に飛あがれば岩を切山を貫きたる寺あり宮あり家居所にわたるして日本に見なれぬ風土なりもし是や函谷関ともいへる所ならんかところにおもひつゞけて大なる岩穴をくゞり行ば戸のひまよりともし火もるゝ住居ありさし寄て覗け



ばいとやさしき女のあはれらしく欄にもたれ団扇うちなやめるをみておどろきまさしく唐土のけしきなり美人天上より落るといふ黒髪を高くむすびてくれなゐのきぬもとゆひにうちかざしたる細眉のすがたねがはくは細腰につかんと詠ぜし風情ゑもいはれぬありさま也嗚呼なつかしのむかしやきのふは少年けふは白頭いづれの家にかたよりにて日本へかへらん事をたのむべきと嘯ぐうちはやしらくと夜明てよくく見ればかねて聞伝へし我水戸のひらかたといへる遊里なれば大に肝を潰しながらよろこびかぎりなく仏神の加護ありがたかりきとかたりける

名馬の墳

陸奥国何某侯年久しく寵愛し給ひける背白とかやいへる名馬を養ひ置れしが一年御入部の時みづから厩に入て背を撫顔をなで給ひ汝年老たれば今は足も覚束なく此たびの供にはかなふべからす心やすく此所に留主せよとのたまひけるを謹でうけたまはるありさまにて頭をうなたれしほくとせしが其日より飼馬もくらはず七日が間水一滴も飲ざれば厩の別当此よしを言上しけるにふたゝび厩に入給ひて汝さほどにおもは、召連行べしかならずやしなひをくらへよとのたまひて又背を撫顔をなで、いたはりたまへばたちまちいさましき眼色と成かいはをすゝり高くといなゝきてよるこびけるとなりさて御供に召つれられて漸宇都の宮辺までは歩行けるが流石に老馬の足かなはず其所にて命を落し葬りしあとに塚を建今に名馬の名を遺しけるとぞ聞

人泪を流しける

花洲善兵衛

奥州水澤の駅は仙台より古道二百二十里奥にて南部松前に通ふ往還なり人家軒をならべ近隣交易の為に日々市をなすよき城下なりこゝに花洲善兵衛とて毒虫蛇のたぐひの懼おそるゝ守をいだし人あり予も此駅に杖をとめてしばらく長途を休らひしうち大なるおのこ蝮蛇にさゝれあてのごとくはれ惣身大になやみけるがたちまちに治したるを見たり又所の人いふ先年女の陰門に蛇の入たるを半くゝりとめてつれ来りしがまじなひてもとのごとくなれるを見しと其外奇特かぞふるにいとまあらずされはにや近ころ傍に類家出来て守を出すにこれもしるしありて次第に繁昌す善兵衛こゝろにおもへらく我家の伝法他へゆるせしことさらになししかるに何をもつて秘とし密としけるやいぶかして或時善兵衛かの類家のもとへ行事の子細をたづぬれば今は何をかつゝむべき只よのつねの紙に花洲善兵衛と書付て能くつゝみ封印し是をあたへるのみなりとかたりしとぞすべて陸奥一國は花洲善兵衛といふ名を唱へても即時に毒蛇退きてあとをかくす事妙なりとかや世にめづらしき咒呪なりけり

鯉節の味噌漬

伊勢の国越坂といふ所に西光院といへる浄土宗の寺あり今より二代先を玄譽和尚といひしがむまれつき無欲にして貧者に身の一衣を脱て施し我一飯を人にゆづりて身は麩食をくらひすべて

名利をこのまず心流水のごとくなりある時京都白川橋のほとりに出て借宅し三とせばかりおはせしが若かりし時乞食の修行をせしに魚の骨まじりなる飯をくらひたるは中くにつらかりきとかたられける又隣に日蓮宗の僧ありて無二の友なりしがある時味噌漬の器よりあやしきものをとり出して俎板にのせ切はやす夫は何といふものにとつねけるにおのれは何といふものかはしらねど味噌漬にしてよきものにと問ひければよしといひしゆへ市にもとめ来てかく漬たりといふこは鯉ぶしとて腥きものなりときゝて笑はれけるとぞ

鶴沢市太郎妙絃

鶴沢市太郎は義太夫浄りの三味線ひきことに上手の名を得たるものなりある人いふ其音色細く奇麗によきいとすしに水を流せるごとし又ふとき事大山をゆするに似て雷のひゞけるかとうたがふ手をもつて弾にはあらずこゝろをもつてひくなるべし惜ひかな本国伊勢にかへりて近き比死たり此もの津の大門町かやいへるわたりへ座敷上るりに呼れ行て三絃の調子を合せける時其音色いといぶかして座敷を破り人ぐゝにわかれを告げ帰りしがはたして其夜隣家より火をあやまちて大にはいもんせしとなりまことに自然の妙を得たるといふべし

郡司屋敷牡丹

小野小町は出羽の郡司が娘なりと古き草紙にも遺りて其裔今にありともきこへければわれむかし此國に遊びし時古きことよく

しれる人に近よりてたづねけるに山縣より少しへだてて天童といへる駅ありそがわたりに郡司屋敷となんいひて露ばかり其名残れるよきこゆある懐かしのむかし人の跡あはれなる俣に葦屋奥深く造りなしたる柴の戸押ひらきあるじにまみへければ今はおぼろけに古き調度もなく只記念に残れるものは此庭の牡丹なりよくこゝろを附て見給へとおしへけるされば斜なる日影西よりさしかゝれども此牡丹の枝葉地上に影のさらざるは一つの不思議なりといへば主いふむかし此根を袖にして帰たる人多くの牡丹の中に植交成長せしに此種のみ地に影のうつらざればまことにきたいなりと手をうちおどろきけるとなり

くゞり川

同国山がたの城下をはなる、事一里ばかり東南にあたりてくゞり川といふあり水上は昔炭焼藤太がしばらく栖せしと聞えける松が丘よりしぼり出る溪水なり次第になんくゝと流れてすでに半道ばかりにして水地中にくゞり入一面の白砂川原と成て水の行所をうしなひける良過て又水涌出元のごとく流れて青々たり俗に名付てくゞり川といふ

最上川并羽黒山清火

出羽の国合海といへるより最上川を船に乗て下るゝ最上川上りかねたるいなふねのくだるはやすき世のならひなりとよめるが如くいかにもさかしき早川なり奥羽両国の山々谷々ゝの流水落合て果は北海に入ル大河にして両岸山そびへ巖尖りていはんか

たなき風景なり時として草木一同に紅葉天を焦し間にくゝ杉柏うるはしく瀧水四十八ヶ雲より落て白糸のごとく布をさらすがごとくありあるひは綿をたばねたるがごとく雪持柳のごとく有て眼をおどろかし心いさしましかりけるこゝ過て仙人沢といふあり此山に住る翁の齢ひ九旬に余れると見へて白髮千丈と垂れ掌に香を炊き人々舟より声すれば崖に出て臨む我々は心せかれぬる友どち船にのりあはせければこゝのぼらす只水にうつれる山のけしき入日のあはれなる風情に魂をうばはれたりへ最上川底ゆくかげのくれなるは早瀬に移るもみぢなりけりと詠じつゝ羽黒山に上る惣門に入り観音世尊をはじめ三世の諸菩薩ならびて森々たる霊場なり絶頂より落来る瀧を氣まが瀧と名づく仰き見れば雲遠からずして半にくりから不動のかたちをあらはす是より石壇数百間を上りて石の鳥井あり権現のましますいたゞきまでは三十六丁とかや本堂十四間四面高さ雲霧をつらぬきまへには霊水あり方一町の大池なり諸堂影きらめきうつりて信心肝に銘ずかたはらに天狗堂ありあやしき木像左右に立り渺々として白昼も夜陰のごとし当山配下の修験こゝにこもりて夏中行法をはげむ所なりしばらく過て奥の院あり此地寂寞として水流れ橋横たはり諸堂草々として袂をしぼる大なる一堂あり石の鳥井たつ此所に当山ひらけてよりいまだ絶ざる神火あり何といへる木にや有けん大き二かゝへばかりなる丸太の二たけ余もあるらんとおぼしきに清火けふりなし更に燃ずして歴然と

火気光りわたるこれ清火堂とかいへるなるよし三尊影向といふ事あり正に是を拝せし人数多なり吾は見されは筆にもしけり

漁人の辞

羽黒山を出て鶴が岡の城下にいたる此間手向より三里なり一文わたしとなづけて湯殿山の流れより最上川に落入大川有梵字川といふ砂子清らかに水涼々として船上にあり下にあり友よ舟の声らうがはしく水けふり立川浪に遅速を争ひて早瀬を過るせつかいやうのものをあふちて船を縦横になす水上は月山雲に聳かしこには鳥海山の雪夕陽にきらめきて富士の俤にことならず小石川原に毛氈など打敷てこのもかのもに一むれ二群よききぬ着たる人々うち集て流に竿さし釣するもあり鍋釜にこぞり合てわけもなき唄など諷ひさゝめきたはふるゝもあり小春の日影たのもしく城下の貴賤此所に遊びで終日うさを晴す栄耀とぞかくて鶴が岡を過酒田を立て象潟にいそがんと杖を立るに高砂子に脛を踏込あゆみくるしき北海のあら浪笠をうち蓑にしぼりて休らふべき家もなく小高き山の陰に入て漁り人のやどり幽なるまどうち叩てぬるみ一つ振舞給へなどいへども詞かはりて聞えず見もしらぬ旅のすがためづらしとや思ひけんふたりみたりかけ出て何かも物いひゆびさしなどしつれどしらぬから国にわたりたる心地して一音も聞へず吾くが詞も人々の耳へは通じがたきにや召連たる男の袂をとらへておのが住居する深き穴のうちへつれ行一つの桶を出し何かはくらふ真似をしてして見せ



つ、蓋をひらき見て俄に顔色かはり大なる声を上げてシヨロコ
 タカ コカイ ヲツケ ナク シツケイタといひていかりけれ
 ば老女答てヨメ クツケイ コカイ ヲツケイ ヘツケイ ナ
 ツケイサとあるしに向ていひければ若き女面を赤らめてコン
 ヲツケイ モツケイ ナク ナツケイサ ヲミ クツケイ ヘ
 ツケイサとはら立顔に申ければ吾くからうして此家を出吹浦
 に宿をとりて此詞覚へたるまゝを人にかたり問ひければ先初に
 いへるシヨロコとは松露なり吾く振舞んと出したる塩漬の
 松露が大に減たりといふ事なりタカは誰コカイは此様にヲツケ
 は大きうナクは無シツケイタはしをつへ挿絵たぞとなり又
 老女が答へしヨメは嫁クツケイは喰ふによつてコカイは此様に
 ヲツケイは大きにヘツケイは減からにナツケイサは成りけるさ
 といふころなり又嫁女がいへるコンは此ヲツケイは桶モツケ
 イは漏からナクは無ナツケイサは成るさなりヲミは御身クツケ
 イは喰からヘツケイサは減るさといふ事とぞ聞えし

東遊奇談卷之三

東遊奇談卷之四

目録

駿河藤橋
 白鳥神社并化邪劫棺

伊達墨塗

輪燈蕊生
 錦木塚
 王子社狐火
 天狗呵狸人
 石巻貞婦
 清好七日詣
 佐藤車松
 信夫摺

東遊奇談卷之四

駿河藤橋

甲斐の国身延山は天竺靈鷲山の傍ありとて日蓮上人深く懇望し
 給ふより葉桐左衛門是を寄附して弟子と成りともに推敲してか
 はかりの霊場とはなしける抑惣門を入より七面山の奥の院にい
 たるまで境内七里なりとかや富士山の絶頂半腹より空あらはれ
 出て手をさし渡すごとくに隣りて回国たて川の流を眼下にのぞ
 み船を下す事木の葉をちらすがことき早川なりふもとより東海
 道岩淵といへるまで九里の間時をうつさずさかまく浪に任せて
 下る川下は富士山なりこゝに竈が淵といふ難所あり大川せまり
 て水漲りおのづから千尋の淵と成て高渦巻立船をくつがへす事
 度々也兩岸屏風を立たることき巖の高き事千丈此いたゞきに
 生育たる藤かつらを結びからみて農夫山賤の行通ふかけ橋あり
 岸より岸の間五十間に満り是世に名高き藤橋なり我も此道にま
 どひ来て渡らんとせしかと藍のごとくなんくたる深淵はるか
 の底に見へて雲を渡れるがごとく一足あゆみ出せば横さまにゆ
 れくとうごき出忽めくるめきしばらく虚空に誘はれ斯て天上

より大地に落んかと覺へて進退こゝに究りたやすく足を出す事
あははざるに山稼するわらはべどもがゆきかふを見れば鳥翅の
かよへるよりもいと軽げなりさて其近きころ塩俵を負たるおの
こ半渡りかゝりしが蔓踏切既にかの淵に沈んとせしを手先にあ
たりたる蔓一すじをとらへて爪先はみなきる水にそゝぐばかり
ぶらさがりてあやふき命の境なるを人々見つけたすけたりと
所のものゝかたりけるを聞てへたとへにもかへらぬふちにしほ
売がからきいのちをたすかりにけりと口ずさみてざれこといひ
ければ追々に筆をとり紙をのべてしるしけるが今も其塩売が
沙汰といへば此狂歌をいひ出せるにや吾がしれる人其後富士川
洪水の時こゝに來りて其事を聞しと語りける

伊達の墨塗

奥州伊達の郡築館といふ所に年を取春を迎へし事ありこゝに正
月十四日墨塗と云事あつてはじめて嫁を迎へ智を取し家に行て
夫婦のものゝ顔に墨をぬる事を祝ひとす年々の例なれば兼てあ
たらしき夫婦は其日を心得たとへ親しきゆかりのものたりとも
ゆだんなく近よらざるやうに立まはりすわといはゞ逃出んと
用心するこそおかしけれ人々此日は是を興じていろゝ心附ざ
る斗畧にて思ひかけなき所を引とらへてぬる事なり吾止宿せし
家にも新らしき女夫ありて翌日は墨塗られん事を宵より覺悟し
て別座敷にやこもらんなどいひ合せ居たりしか夜明ていまだ目
さへ覺ざるうちに宵のほど夜ばなしに來りし六十あまりの老人



重郎治といふもの来てよべたばこ入をうしなひたり見てたべな
んどいひてそこ、さがしければかの嫁何のこ、ろも附ずとも
く、に其あたりを見まはり近よりけるを引とらへてはうど塗る
簀こらへず後より是はいかにといひつ、引のけんとしけるにふ
りかへりて又べつたりと簀の顔へも祝ひける此家に今年八十の
翁ありて是を見つ、よろばひ出重郎治よい年をしてたしなみめ
されといひけるをお手前もといひながら又翁が顔へもぬりつけ
て早く逃てかへりしなり吾は奥座敷にこもりしが何か勝手
賑ひけると見に出ければ常くたはれごと嘶し合たる婆嬪ども
四五人うち連来て斯て我にぬらんとすへ挿絵思ひ寄らねばお
どろきてもとの一間に逃けるを追く、にかけ入てした、かにこ
そぬりたりけるこへにおどろき其家の人々女どもを追とり巻あ
るひは鍋炭する墨など取く、にぬりかへし数多の男女うちみだ
れたがひに顔はまつ黒にぬりにぬられてた、かひけりはじめは
あたらしき夫婦のみなりしが後には大軍に成りて村中の家々主
も家来も老たるも若きも尼も坊主も入乱れ顔真黒にぬられつ、
泣上戸あり笑ふあり酔たるも酔ざるも実春の人心おもしろかり
ける遊びなり

白鳥神社并化邪劫棺

奥州白石の城下は仙台より廿里上方なりこ、に白鳥大明神とて
大社ありた、はしき御神にして産子はすべて諸鳥をくらははずお
のれしらず衣類に鳥の毛など飛散さへ大になやめるとなりある

時産子の何がしいかゞしたりけん大熱出てまくらあがらさりし
がよく見れば羽織のきぬに鳥の毛織交たるをしらず調へ着
たりしとがめなりとあとにてしりたりとなん又出羽の国何某侯
江戸より帰国の時此わたりにて鳥毛の鎗何事もなきに中ほどよ
りほきと折たりとて今は此海辺をのぞきて山ごしに通り給ふと
かや是一とへに此御神の崇らせ給ふなるべしこ、に忘れずの山
といふあり至て高山なりむかし日本武尊吾妻を忘れがたしとの
給ひしよりかく名づけたりとぞ一とせ山中へ白石の城主狩に出
給ひし時高き梢に棺を引かけ置たるあり是を下しひらかせて見
給へば三十にたらぬ女の白綾の小袖うちかさね同じかいどりを
打かけ下髪長くとうちなだらせ鉄漿くろく、と附たるがさ、
りんどうの縫紋きらひやかにいまだ身まかりて遠からざるにや
生るがごとく座したるはまさしく武士の妻なるべしとも見へし
が天狗のわざならでいかでか、る高山にかくのごとくあやしき
事はなきものなれど天狗は不浄を嫌ふなれば更にさること、も
覚えず元より賊などの企及ぶべくもあらねば全く化邪といふも
の、所為なるべしと聞えたり化邪とは古き猫あるひは山賊の
妄念其外あやしきもの、霊にて陸奥には今もま、ありと所の人
く、のいひけるなりか、るあやかしの神にいざなはる、は仏縁
うすき人なるべし

輪燈蕊生

仙台さかな町の裏店に親子三人むつまじくくらしける与助とか

やいへるものあり若輩なれども常々仏の道をしんじ家には不相応の持仏堂あり輪燈甚だきらびやかに朝夕塵をはらひ仏壇清く持なしけるが一夜のうちに輪燈の下皿のうらに細きはり金のごときものはじかねの辺にて二寸ばかりものび数は四五十筋もありておの／＼かしらを揃へこと／＼く白き花をいたゞきて美しきもの生れたり人々是を見んと群集しければ門を閉て一人も内へ入れざりけりされどもあるじのおのこ此事を歌よみてよとわれをたのみける其序に見たりけるかの蕊のごときものかたちは朽木などによく生ずるくさひらに似てかしらにいたゞきたる白き花ももとより同じかなものにてしかもことさらに手強くありけり又同じ年相州何とかやいへる所の百姓鋤に花の咲たるをもて訴へ奉りたるをも見たりしが鋤の刃先より蔓出からくさのごとく生延て葉あり皆同しかな錯なりまことに不思議なるものなるべし

石巻貞婦

仙台石の巻といへる城下より古道六十里をへだて、松嶋より本道七里北ひんがしなり此地東海通船出入の大湊にして万戸軒を並べ牛馬踏所をうしなふばかりの繁花なりこゝにあるものゝふの娘婿かたちめでたかりしを同じ家がらの男恋したひて人の家につかふまつる女のなかだちにてたがひに親しらぬ中と成終に身ごもりけるを娘いたく悔て夫にもしらす夜の暁がたに淵に入て死たりけり男これを聞て其あとをししたひ同じ淵に沈みて命

を捨ぬ媒の女もかくと聞よりかぎりなくなしみてふたりのあとを追同じく淵に身を投て死たりしは流石にものゝふの家に育たる心健気也と人々涙をこぼしける

錦木塚

げにや聞てもしのぶ山其通ひ路をたつねんと謡曲にきこへし錦木塚といへるはみちのく忍ぶ郡の辺り桑折の東南にあたりて双ツの塚并二錦木の宮あり又南部狭の里といへるにも錦木塚あり予つらく思ふにむかしは人を恋ふるに今の世のごとくいやしきものも文をもてかよはずといふ事なくかの錦木を軒にたて置叶はざれば千束の文をおくるごとくいくらも建て恋したふ事成べしとされれば狭の里に限りたるにもあらずみちのくのむかしは皆かくこそありけん千つかに及ぶまでかよへども女心いよ／＼二親のゆるしななければとて聞入ざれば男淵に身を投て空しく成女これを聞て同じく淵に入て死たりける親々悔てなきからととなり合に葬り塚を建しより錦木塚といふ元より錦木もおとにも埋しときこゆうたひに編る忍ぶの里の錦木塚は此二ツの塚なるべし芒茅萱茫／＼として道絶名も埋れけるを里人の先だちければともにふみわけしたひのぼりて古きあはれをもとめたり

清好七日詣

江戸さかい町の辺りに清兵衛といふ仏師あり人みな清好／＼と呼で名高き男なり一とせ願ふ事ありとて福徳稲荷といふ神社へ朝末明に出て七日詣をはじめけるに満参の未明うしろより人來



て背を叩き清好くと呼けるを振かへり見れば常く一腕を分ち合ふ友だちなりされどもものもふでの道なれば唯うなづきて通行はいつにかはりて不興也とや思ひけん袖をとりて引とむるを振放して（挿絵）行んとするにしきりに手をとり帯をひかへいかゞしつらんなどねんごろに問けるに只何とせし事にもあらず物もふでなればなりと云事を手を振かしらを振て仕かたをすればいよくもて心得ずと背をとらへ腰を抱きこは氣を取のぼしてんいかなる事にやとおろくした、うごかさず吾はさにあらずかくくの次第なりと口ををしへ物によそへてしらせどもひたすらにはなさじと引とむるを無二無三に引はなし逃んとすればいよく抱留つれかへらんと引とむるを吾は行んと身をもがきたがひにしはらく引合ふうちあたりの人々起出て何事かはと立かゝる今は是非に及ばしと清好大音上て吾は無言の願参りなりよしなき御身に出あひて満日のけふとなりあたねがひの破れたりと聞よりの友いづちへか足ばやにこそ逃うせたり

王子社狐火

江戸王子権現のかたはらに稲荷のお、ん神を勧請して関八州の狐どもの官職を得る社也と申伝へける年々の大晦日の夜はもろくの狐集り官位の高下を改るとておびた、しく火をともし神前につゞき来るを人々詣て是を見るよしきこゆ我も詣見届ばやと一とせまかりて是を見るに実や人の噂にも違はず詣来る人あまたにて辺りの茶店ことかくく群集したがひに膝をもた

せ合て今やくと待ける也すでに其刻になればひとつふたつ火を点すよと見るうちにたちまち数万と成てこの森かしの梢ともし火ならぬ所もなく追くにはせよりにて次第に社頭につきけるやがて入乱れはやきはかへり遅きはすゝみて終夜入もみ次第に消うせぬ参詣の諸人恐をなしいよく奇特をかんにける

佐藤車松

奥州桑折の里より三里ばかり西に当りて佐藤兄弟が館のあとあり其わたりに娑婆野の薬師といへる古き寺ありけるが兄弟の菩提所にてむかしは莊嚴きらびやかに諸堂美くたるべけん今は世代り星うつりて僅に草の庵をむすびむかしの人の苔むすしるしを守のみなり石碑ことにあれば角くうちくだけたるさまいとあやしく思ひたづぬるに所の人々疫癘を遁れあるひは瘡をしりぞけんためとてうち欠守にもてかへるとかたりける又かたはらの里に年ふるき松あり葉色緑していとめでたければはるかの所よりも目立ける梢みな渦の巻たるごとき車の形をなす木のもとの家によりてたづねけるにむかし佐藤が愛樹にて家の紋をあらはしたるとなりいかにも佐藤が定紋は源氏車なり草木心なしといへどもかゝる奇特を見る事哉と人々もかんじける

天狗呵獵人

奥州仙台より出羽国最上山形に越る時尿前の関を通り山中といふ村にかゝり獵師の家に泊りけるにあるじの心打解ければ

囲炉裏により添てこしかた行末の事など咄し居りしが同じ獵師ふたり来りあるじをいざなひ行んといへければあるじいふわれはかのおとがめなりといひしを聞てさらばとて二人は出て行けり我も不思議さにたづねければかのおとがめとは天狗の事なり吾此頃向に見ゆるはるかなる山の端の松が枝に驚の来て巣つくと見しゆへ鉄砲引提はせ行て頓てねらひ寄て既に火蓋を切らんとせしにやれ待と一声天地も轟く大音にて留けるこは見たがひたり御免あれといひもあへずはせかへり夫よりかまへてこもれるなりすべて我等天狗にあふ事度くなるが七日が間引こもれば其後はくるしからずさなくして出ればかならず怪我をもとむるゆへ謹み恐れてかたく籠り候なりとあるじの獵師がかたりける

信夫摺

むかしは陸奥の摺衣三つあり宮城野の萩すり衣岩手山の躑躅衣信夫文摺衣此三つなりしが宮城野岩手山の二つは絶て忍文擦のみ今に遺れり雲のうへ人もむかしより愛給ひし例ありて童蒙抄には打違ひうちみだれたるがごとし歌林良材には髪を乱せるがごとしとあり又清少納言のことばにみちのくに石二つあり是をもて摺たる衣をしのぶ摺といふ山藍にて摺たるとあり文摺といへるはいにしへあやもめんといふあり今の嶋もめんの事なり文といふはあやどり織たるといふ心なるへし此石も文にみだれたるがゆへに乱れそめにしと詠じ給ふか古今集にはみだれんとお

もふとのせられたり戻摺と書るはうちもぢりたるといふこゝろならんか都西山遍照寺の翠簾の縁に残たるをやごとなき人々の賞してむしり取給ひしとなん其かたちかしこに僅残りたるを見るに正に今土中より掘出したる石の文にして乱菱のかたち明らか也清少納言の遺書はた加茂の真淵が伊勢物がたりの古意に春日の、若紫といへる條にみちのくのしのふ摺の事を注せし也今見れし石こそ全く清少納言のいへる二つの石の其一つなり是まで賞じける伏たる石も其一つにして不可なりといふにはあらずこはある書に鑑石の一名あり面をあらはさざるはいとおしむべし今の石はたましく聖代に逢て出たる成べし埋れるを起し棄れるを拾ふは旧址勝地に杖を曳常なれば古人の遺書をさぐりもとめて是を見出せしもまた幸甚也豈国君の徳果ならざらんや

忍郡の御世そしるけきあらかねの

土より地より玉も出なる

一 無法師がとみに見出せし古き

しのぶ摺の石を絹に摺て贈らる

名にふりて聞しばかりや陸奥の

しのぶ文字摺けふ着染らん

東遊奇談卷之四

関太公

東遊奇談卷之五

目録

東山西山

尿前関

徳本仏相

西行庵蛇

狛戸怪異

六百載の男

婦女罵雷

花子の茶湯

東遊奇談卷之五

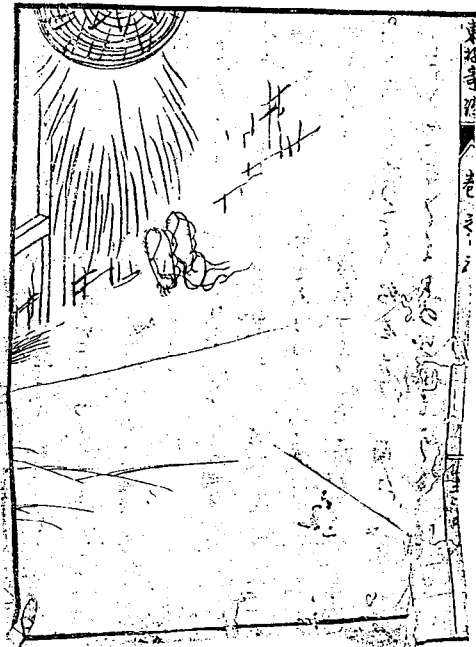
東山西山

仙台二の迫の辺りに東山西山とて二人の儒者あり一人は温和にして一人は活気也ともに相和して交りことに厚しいづれも博覧のきこえありて国君より禄を給ふ西山は常に俳諧をこのみ雲水斗薨の風客をとゞめ是と話して遊びけるが句の下の仮名書に斗離と居たる文字を見て今年我命の終らん事を曉る果して其ごとく死たりとなん東山はつねに十歩行にも騎馬をこのむ門人等師の落馬せん事をおそれれば長き杖をこしらへ馬の上より是を突歩行しとなり

狛戸怪異

我松前に渡らんとて南部森岡の城下なるくすりや拾左といへる和薬商人と誘ひて八の戸ちかく行けるに山中に日暮てすべきやうなく狛師の家に一夜の宿を乞けるが心よく聞入さらばこゝに來り給へといふにまかせて門の細流に手足をそゞぎ焚火のかけによりて終日歩みつかれたる愁をわすれけるあるじ何かは用あ

りげに外に出けるわれくは旅草臥にぶらく眠出て拾左がうへにうちかさなり囲炉裏の火に顔をあぶりつふと頭をあけ納戸のかたを見るにのうれんのうへより白き女の顔の黒かみうちみだれたるがにたくわらひのそきけるあつとおそれて拾左をおこしかくとさやけば又のうれんの裾より覗きてわらひ居るを拾左も見るとさきふるひて顔うち覆ひすくみける我つらく思ふにはたして狐狸の業なるべしわれくは旅のものとしてあるじの留主に例のかれらがなくさむにやなどか恐る事あらんくらきは心ひかるものと囲炉裏の焚火つみ直しさらばあかりを照さんと心づよくさしくべけれど生木なれば燃がたく手ごろのものも有べきと庭にとび下りさがせども元より葉柴もあらざれば手とく軒端にさくり行算引ぬきたくべしと斯て手を延ぬかんとすれば下家より何かはしらうなる手をさしのへて口がやせ脚をしつかとらへ離さねばこはかなしやとふりはなしあとも見すしてかけもと二人はあわてふためけばかの首いよくさしのぞき口をひらき眼を光らし今やは出て我々を鬼一口に服せんと身の毛もよだちておそろしくあるじもへんげのものならんと震ひわなき居る所へあるじ何かは携へて何心なく内に入ともし火かきたて吾くにもものいへどもかゝるうき目に挿絵逢ひたれば何と答へん言葉もなくあるじか顔をもし見たらばさぞすさまじきすかたならんと只目をふさきふるひけるをあるじ心得てさてはおのく何をかを見ておとろき給ひ



たるかもしや納戸の女出たることもや有つらんかれは我娘なるが吾世わたりのわざあしきむくひにや生れて唾なればかたぐの前をはゞかりて一間にかくし入置たりかならずおどろき給ふまじと聞てやうくかしらるをあげ人心地にぞなりにけるさて又一つ不審有何をかくさん焚柴のあり所をしらざれば下家の軒端を引ぬかんと行けるがやがて下より吾すねをとらへたるものあり是はいかなることなるやとたづぬれはあるじ横手をうち是も吾あやまり也かれは飼置たる子猿なればさらに気づかひ給ふなと聞て兩人ははじめて打つきあたたら肝を潰したりと笑ひて主がとゝのへ来たりたる酒などくみかはし酔忘れつゝまくらを安くいねたりけり

尿前関

われむかし奥羽兩國に行脚して松嶋より象潟にこゆる時尿前越といへる大山に懸るこゝに関所ありてたやすく往来を許さず関守我にむかひていふ旅僧何の為にか深山を越るやおのれいふ雲水なれば雲のごとく水のごとく心の行んと思ふ所へ杖を及ぼすなれば何のためとて心をとゝめしあて所もなし只見あてる所を種として句を吐歌をよみ遊び歩行ける三界無庵の坊主なり関守又問ふ此わたりは秋ながら山の気色も冬めきて都人にはいとめづらしかるべし此風情を歌よみてあらば関をゆるすべし疾よみて聞しめせと詞和らきければうなづきて腰視より筆取出しふところ紙にしるしきし出しける歌にへ雪かとぞ見る目も寒

き秋の末に尾花吹ちる今朝の山風関守大によるこび其夜は我家にとゞめて長途をいたはりさまぐにもてなし明れば九月廿九日所の習ひとて稲の茹上てふ祝ひ事に歌ちんなど搗わかれをおしみてたがひに泪をこぼしけり此関守の名を路昔とて折くは今におもひいだすなり

六百載の男

尿前の関を過る事十里あまりに瀬見の湯といへる温泉あり此山のいたゞきに昔北国より奥州へかよひし古道あり義経主従此街を過るとき俄に北の方産の氣附てすべきやうなくあたりの小家に忍ばせて其家の夫婦をたのみ産家の介抱申せしとなん其時の男近きころまで存在せしがふりにし事どもたづねけるに臆げに忘はてゝ大かたの事はかたらざりしがよし経といへるにや中にも大将とおぼしき人色黒く骨太にあらゝしき武士産婦の為には夫トラしく見へ又一人の出家あり此僧色白くやさかたなりしかされども背は高かりしと覺へたり其外の人々はみな同じやうにて忘れはてしとかたりけるとぞかの出家こそまさしく弁慶なるべしさて此むかしののおのこすでに六百歳にあまれる年なるに私たちは十歳ばかりの童子に似て面は猿のごとくわらうだといふ番のかたちせし大なるものに這入て家内を引すり歩行しが心は実正にて有しとなり国の守より御扶持たまはりて近きころをながらへしかど吾雲水に遊びし少し以前身まかりしとかや残り多き事なりけり又此所にて誕生し給ひける君を家来の何某懐に

入ていふ此地はいまだ敵の追来らんもはかりがたし秀衡の地に足を入るまでは必こ糸を立させ給ふことなかれと申けるに不思議や泣声を上ず秀ひらの領分に入て初て声を立て泣給ふ其処を今鳴子村といふ泣子の転じたるなりとぞ又初て尿をし給ひし所を尿前といふかの関守が家もむかしよりつゞきたりとかたりける

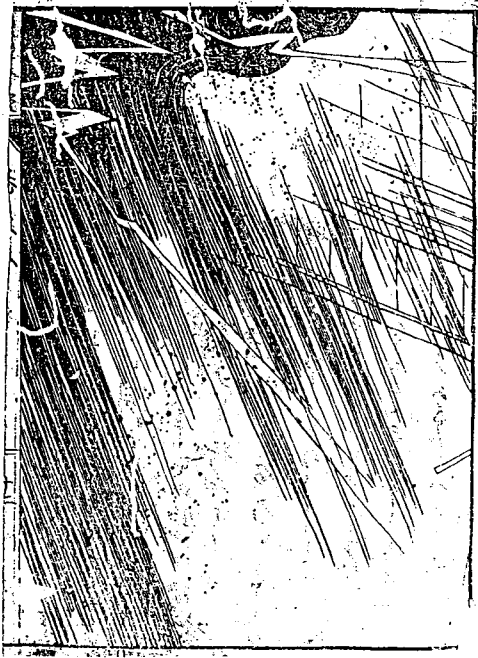
徳本仏相

紀州黒江日方の辺りに徳本といふ名僧あり山中に引籠り常に櫃をくらひ蕎麦粉を嘗てしかも五穀をくらはずたま〜ものほしき時は峯より長き綱に畚を下しこれに乞て世俗の人に交りて断光を隠し徳をうづみ柴の折戸に身をひそめて念仏三昧の行者なりしがあまねく其徳あらはれて国の守より物たまへども辞してむさぼらす今ははるかの峯に入猪猿を友としいよく人世を遠ざかりけり此聖幼少のとき両親出家の望あれば去御寺をたのみしかど中〜出家すべき生質に非ずとさし戻しければ両親大になげきとても出家には叶ふべからず今より田畑の業にせめつかはんと朝〜たばこの虫をとりに遣しけるが終にむし一つをだにとらでかへりければ父いよくいかりて折檻すよつてなく〜又たばこ畑に行虫にむかひていふ我朝ごとにも此所に来れどもひたすらに汝等が命を救はんことを思ひけれどもむなしくかへれば父の怒りに逢ふ父の命に従へば汝等が命を助る事あたはず汝等をたすくれば父の気色にそむく今よりいづ地へなりとも

立たるべしさなくば是非に及びがたし願くは速にかへるべしといひ聞せ念仏千返唱へければたちまち行方なくうせたりとなん此時徳本いまだ十四の年なりけるかゝる奇特によりて仏法のありがたき事をさとり夫より家を出て元の寺に行つひに釈門に入しとなり先年本山へ上京ありてしばらくいまそかりし時予も不思議にまみへけるが山谷に木の実をくらひ猪猿を相手にし給ひける気象には似るべくもあらで面貌極めて柔和に少し細眼なりしがおのづから仏の相好侍りければ密に渴仰の思ひをなし侍りける

婦女罵雷

伊勢の国田丸の奥熊野路にかゝらんとする山中に百姓あり夫婦の中に吉人の娘をもつ年ははや廿にちかゝりしか容儀もうるはしく心りはつに父母によくつかへ夫を迎んといへども双親ましますうちは先無用にし給へと辞して起伏をむつまじくくらしけりこゝにいとせ夏のころ父は野山に出て畑ものに水をかけ土をやしなひはたらきけるが俄に空かきくもりいな光りし雷鳴事甚敷終に父が上に落て命を失ふ妻子は足ずりをして歎けどもかへらず熊野往來の木賃宿に母と娘は渴〜に日を送りけるに或日大に夕立して雷しきりなれば人〜耳をふさぎ臍をかゝへあるひは蚊屋を釣押入に這入おどろき騒ぐに老女と娘は門に出て空をにらみ大こゑをあげいかりのゝるありさまを人〜いぶかしくおもひかくあら〜敷空の気色に女の身として少しもお



どろき給はざるはいかなる事にてありつるぞとたづねければ兩人涙を流し吾為には夫かれが為には父なる人此雷の為にうたれて命を落すなればう悲しき事にはあらずや依て雷の鳴度ごとに吾くはまちうけてもし此所に落たらんときは直にかけ寄うち殺しうらみをはらし申さんと兼て心得さふらふ也とかたりける実老女の貞節娘の孝心いはんかたなきふたりなりと各袖を絞りける（挿絵）

西行庵蛇

東山双林寺の境内に西行庵といふあり丙申大火の後しばらく借庵せし女の常縁ばなに出て縫仕事せしか大なる蛇の折々出て其辺りに遊ぶはじめはおそろしかりしが日々出て何のあしき事もせざれば追逃すつみもあらしと捨置うち何となく飼なれたるごとく手にしたがひ一日出ざれば何とせしやなど思ひし也隣に芭蕉堂といふ俳師ありあるじは本國加州へ行て尼得寿といふもの一人留守に居しがつれづれのあまり夜々かの女をこのみ同じ蚊やに臥けるにふと目覚て起出れば大なる蛇蚊屋の裾にわがたまり居てうごかす一二夜は追やりけれども毎夜つゞきて目にかゝりおそろしく成ければ思ひ当る事ありと翌晩より余人をたのみかの女をのぞきければそれよりふつ々来ざりしとぞ其後かの女は何となく色青ざめぶらゝ病ひに終にうち臥死たるか床の下に大なる蛇わだかまり居りしと尼得寿かものがりたりなりげにや西行庵の桜の控には年ふる蛇の住けるよし人の

いひしが去年大雷なり落てかの桜の片枝裂たりし時天上せしを見たりと其辺りの人のかたりける

花子の茶湯

あぶらの小路中立売わたりに去隠者あり常に茶をこのみ雨の日も風の夜もこれを友とし日夜釜をかけてこゝろあへる人々と膝を客合て老後の明くれをたのしみけるにあるとき竹格子のさきに髭ほうくたる乞食の笠深くとかぶりて透間よりさし覗きくするをあるじ何の心もいかず炉にうち向ひけるをひたすら覗て何かはふつくひとりごとするさてはかれめも数奇人と思ひ小窓をひらきて汝も一服呑へしとたつふり立てさし出しければ笠取て敷居にこしをかけさせうれしげにいたゞきてすりのむそのありさま天晴茶道の達人ともいひつへき振舞なりあるじ今一服立んとするをとゞめて銭なるものを愛すればかならず礼を失ふと高声にいひつゝ、かしらを敷居に三度すりつけいづ地ともなくかへりける其後格子の内にあやしき書翰あり是をひらき見れば明正午喫茶進上申度候二条川原しばらく上ル所いさゝかしつらひ置候所を目当に誰かれ御誘ひ御出可被下候とひたふるねむごころにしたゝめたりさてはかの乞食ならんいかなる事をやしつらんと友どちうち連かの二条川原に行けるがはたして萩垣少しとりつころひ青竹を曲路次口をこしらへたりさてこそと内に入は白砂まきちらし屋清く作れり待合とおぼしき小高き所を小石奇麗に敷ならべこゝを過れば又青竹にて中門のかた

ちを作くゞり入ば飛石居並べ傍に水を漉へつくばいの心せし堀水あり又にじり上りの心もちにや稍うづ高き砂原に箒目を入茶席のかたちをもふけたりさて炉のごとく石をたゝみてあたらしき土瓶にりんくゝと湯をたぎらせかたはらに青き平石を置其上に茶壺へ何がしの家の封印のまゝ茶椀へ清水焼茶椀へ紙袋へ入柄杓へ同袋に入たるまゝなどかざり立少し横の方に窪く堀て流れより水をせき入たり水さしのこゝろならん又奈良晒の切を奉書の紙につゝみあり茶巾にせよとの事なるへし菓子も何がしが家の袋に水引かけたるまゝ出し置り其いさぎよき事言葉にもものがたくいとおもしろき風情なりければ各手をうつておどろきけりかくてふところより巾紗とり出し炉にうちむかひ数服立終て一礼をかき認め白銀の小粒とりそへて残し置しが其かねは又格子より投込其後はおつふつ来ざりけりあになつかしの乞食殿やと折く思ひ出せしとかの隠者のものがたりなり

花洛一無散人記

東遊奇談卷之五大尾

寛政十三年歲次辛酉初春

皇都書林

八幡屋 金七
万 屋九兵衛
秋田屋藤兵衛
著 屋儀兵衛